

パンタナル通信

一般社団法人 南北米福地開発協会 会報

2025年12月1日 267号

世界平和地球村の建設と自然環境の保護

レダブランド確立への挑戦

岩澤園長が語る

養蜂プロジェクトの歴史と可能性



レダの養蜂プロジェクトを2019年から主導されてきた岩澤春比古園長に、その歴史と、次世代への継承について話を伺いました。レダ産蜂蜜の品質の高さと、今後の事業展開の可能性について、岩澤園長の熱い思いをお届けします。

特別対談

長年の熱い思いをお届けします。

1 レダ開拓期からの歴史と、プロジェクトの再起動

編集部：レダにおける養蜂はいつ頃始まったのでしょうか？

岩澤園長：養蜂自体は、1999年の開拓の時から始まっていたと思います。当時、日系移民の専門家が船に乗ってレダに来て、養蜂について指導していた歴史があります。しかし、レダの誰が担当していたのかはつきりせず、多くの蜂蜜が取れる状況に

はなかったようです。

編集部：その後、野口君の取り組みなどもありましたか、なかなか継続しなかったと伺っています。

岩澤園長：ええ、私が知っているところでは、野口君が長野県産の巣箱を準備したり、吉村副理事が経済的なサポートを試みたりした時期もありました。ただ、当時の責任者であった中田所長が蜂にアレルギーがあったこともあって、なかなか定着しなかったようです。レダのプログラム全体にも

も言えることですが、短期で来訪者が取り組んでも、その後現地で継続できるのかという懸念もあり、野口君は十分なサポートを受けられなかったのではないかと思います。

編集部：転機はいつ訪れたのでしょうか？



ミツバチの巣箱

岩澤園長：2019年に大きな転機が来しました。神山美子さんがレダに來られ、ボランティア活動をする中で、野口君が設置していた古い、風雨にさらされ、壊れているような状態の巣箱から、蜜蝋の残りを見つけました。彼

女がそれを拾って溶かし、蜜燭を作り始めたのがきっかけで養蜂をやったのです。

「たらい」と私に勧めてくれました。彼女は生物学を大学で勉強していたため、専門的にも詳しくかったです。

彼女のレダのため

に役立ちたいという思いから、本格的な活動が始まりました。彼女は採蜜の際に手袋を使うことや、蜜の取扱い方など、現在のやり方の基礎を築いてくれました。

その後、エスペランサで養蜂の経験がある従業員のアンドロさんが蜂の生態に詳しくあったため、「彼と組んでやろう」ということになりました。2019年から2020年にかけてのことです。

それから養蜂に取り組んでいく中で、「意外と採れる」ことが分かりました。特に2020年の2月から3月頃には、一箱から約30〜40Lもの非常にきれいな蜂蜜が取れたのです。

2 レダ産蜂蜜の品質とブランド化の可能性

編集部：レダの蜂蜜は、他地域の蜂蜜と比較してどのような特徴がありますか？

岩澤園長：私自身、近隣のジャルジンやロマ・プラタの蜂蜜を試しましたが、レダの蜂蜜は「癖がなく、甘味が



レダのミツバチ（アフリカナイズドミツバチ）

強い」と評価しています。酸味もあるのですが、非常に美味しいと感じています。例えば、オリンピックで一番しつかりしたホテルでは、これまでは先住民から蜂蜜を買い、使っていたようですが、レダの蜂蜜の「品質が優れている」、「ゴミが入っていない」、そして「味が良い」という理由で、今では「レダの蜂蜜でないと嫌だ」という人が出てきています。日本やアメリカのメンバーからの評価も高く、ブランド力があることを感じます。

編集部：その品質の源泉はどこにあるとお考えですか？

岩澤園長：レダそのものが、人為的に植えられた植物の花ではなく、野生の小さな花が多く咲くことが理由だと思っています。単一種類の蜜源からではなく、「多様なところから集めて」いる百花蜜のため、そのミックス（配合）が非常に良い結果を生んでいる可能性があると思われます。この「レダブランド」となる可能性を秘めた蜂蜜は、文鮮明先生が源聖聖地、根源聖地に定められた地の特性が生んだものであり、元気で健康な蜂から採れたものです。

また、レダでは年に2回、採蜜ができるという発見もありました。（次面につづく）

(一面よりつづく)春先の10月頃と、夏の終わりの2月や3月頃に、同じ巣箱から採ることができると、管理次第では「かなりいいものをたくさん採ることができると期待しています」。

3 刺されるリスクと次世代への継承、栗原恒誠君への期待

編集部：養蜂を継続する上での課題は何でしょうか？

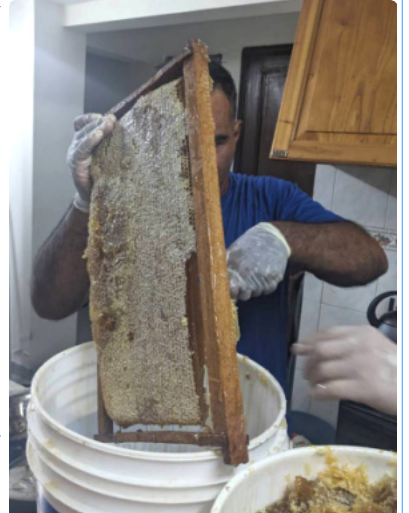
岩澤園長：レダのミツバチは元々アフリカ系のミツバチだったこともあり、サイズも大きく、非常に獰猛(どうもう)です。私も何度刺され、特に目を狙ってくるため危ない目に遭っています。養蜂は「誰でもできる」わけではなく、



巣箱を開き、巣に切れ目を入れるレアンドロさん。

「養蜂に関心のある人で、その怖さも分かっている人」でないとなかなか難しいと感じています。編集部：そのような中で、栗原恒誠君がプロジェクトに参加されたのです。岩澤園長：はい。栗原君は生き物が大好きな人物です。現在、日本の養蜂場で修行しています。彼が専門的にこの分野をやってくれることに期待をしています。私自身、この5年間は「趣味」としてレアンドロさんに動いてもらいながら細々と続けてきた期間であり、養蜂にかかる時間の制約もあります。しかし、レダの養蜂には、他の場所にも負けない「可能性」があることが分かっています。

今後の事業展開の目標は、まず巣箱の数を増やし、安定的に採蜜量を増やしたいと考えています。現状は5箱ですが、10箱、あるいは20箱、30箱、最終的には100箱までいけば、かなり安定的な量が確保できるはずです。



さらに、蜂蜜は単なる嗜好品ではなく、もともとは漢方薬として重宝されてきました。ビタミンを多く含み、殺菌効果があるため、健康管理の観点から点からも大きな市場を持つ可能性があります。特に、気管支系の病気に効果的であることも知られています。南米での市場も大きいでしょう。

栗原恒誠君のように養蜂を経験したメンバーが専属で長期的に担当することで、将来的に大きな収益を生む事業となる可能性が見えてきます。これは遠い未来の話ではなく、「3年あるいは5年先には、しっかりとしたビジネスモデルを作ることができる」と感じています。今後は、栗原君や、あるいは事業の観点で物事を見れる人が担当し、レダでの養蜂の基盤をしっかり作っていきたいと考えています。

取材後記：レダ養蜂プロジェクトは、幾多の困難とミツバチの獰猛さを乗り越えながら、岩澤園長の情熱とレアンドロさんの現場管理によって高品質な蜂蜜を生み出してきました。栗原君という次世代の担い手が登場し、日本で学んだ専門知識をレダに持ち帰ること、レダの豊かな自然が育んだ「レダブランド」の蜂蜜が、世界へ羽ばたく日も近いかもしれません。

栗原恒誠君に聞く、レダの養蜂プランと地域貢献

レダにおける養蜂活動の現状と将来の展望について、栗原君に聞きました。本記事は、岩澤園長の考えに加え、栗原君の具体的な取り組みを読者の皆様にお届けすることを目的としております。

1 養蜂との出会い…一冊の小説がきっかけ

編集部：栗原君が養蜂に興味を持つようになったきっかけを教えてください。

栗原：養蜂に関心を持ったきっかけは、高校生の頃に読んだ一冊の小説でした。『今日のハチミツ、あしたの私』という本で、初めはその本の表紙にある、はちみつのかかったホットケーキの絵がとても美味しそうに見えて購入してみました。主人公が養蜂所で働きながら、多くの困難を越え、人として成長していくというような内容で「すごい素敵だな」と感じました。養蜂に関する描写がたくさんあったり、作中に出てくる蜂蜜を使った料理が非常に美味しそうだったりして、強く印象に残りました。それから蜂や養蜂の情報が興



レダに多いサンカクハゼラン。

味を持つて調べたり、実際に色々な種類の蜂蜜を購入してみました。ミツバチの生態を勉強してみると、ミツバチが驚くほど一生懸命仕事をしている様子、その群れのために必死で蜂蜜を作っている姿が素敵だと感じました。

2 レダで実現した養蜂の魅力と現実

編集部：実際にレダで養蜂をやってみて、新たに感じた魅力はありますか？

栗原：高校を卒業してすぐチャボラ3期生としてレダに1年間行く事が決定して、これまで本やネットでした触れることができなかった養蜂が、レダでは実際に体験できると聞き、ワクワクしてレダに出发しました。

レダで養蜂をやってみて、本で見た巣箱の中のミツバチを実際に見て感動しました。特に、採蜜の際に何万匹ものミツバチが出てくる賑わいは、貴重な体験でした。私は生活の中でミツバチを見ることは少ない環境で育ったのですが、レダでは自然が豊かで、仕事にいつでもミツバチを見られるのが、私にとって大きな幸せでした。時々立ち止まっては、うれしくてスマホで写真を撮っていました。実際レダの蜂蜜はとても美味しいです。巣箱があまり手入れできていない現状であっても、これだけの品質の蜂蜜を蜂たちが頑張つて



た。ミツバチの生態を勉強してみると、ミツバチが驚くほど一生懸命仕事をしている様子、その群れのために必死で蜂蜜を作っている姿が素敵だと感じました。

集めてくれ、利益を生み出してくれる。将来的にも、とても魅力的な活動だと感じました。そして、あつという間に1年がたち、やり残したことも多かったのですが、日本に帰ってきました。レダでの養蜂の体験を生かすため、帰って来てすぐに養蜂所の門を叩き、弟子入りして本格的に養蜂の勉強をしています。もう少しで2年になりますので、来年またレダに行けたらと考えています。

編集部：その一方で、現在のレダの養蜂活動における課題や懸念点があれば教えてください。

栗原：現在、主に二つの課題があると考えています。

一つは、資材の老朽化です。巣箱自体が古くなっていることが懸念されます。巣箱が老朽化すると、病気の原因になったり、害虫が侵入しやすくなったりするため、古くなったものを新しくし



巣箱を開けて、内部を点検しています。

また、スムシ(巢虫)やダニなど、外敵からの保護も重要です。以前、レダで採蜜した際にも、スムシによって被害を受けている巣箱がありました。外敵からミツバチを守ることで安定的に蜂蜜を生産できるようにしたいと考えています。

巣箱の管理が必要なもの一つ理由は、例えば、ミツバチは数が増えたと分蜂(ぶんぼう)という蜂群が引越してしまいます。分蜂が起きると、蜂蜜を採る効率が非常に悪くなるため、これを防ぐ管理が必要です。

もう一つは、巣箱の管理体制です。レダでは巣箱を置いておくだけでもミツバチが蜜を採ってきしてくれますが、日本で養蜂を勉強してみると、人工的に蜂群を増やすことで採蜜量を大きく増やせることを知りました。



搾った蜜をていねいにろ過します。

3 向こう3年間の目標：蜂群増強と現地貢献

まずは、巣箱の数を増やし、採蜜量を増やすことが最も大きな目標です。私がいた時は5箱でしたが、まずは20箱から30箱程度を目標にしたいと考えています。これをこの3年間で絶対に成し遂げたいと思っています。

そして最終的には、養蜂の技術をレダの従業員やレダ周辺のインディヘナの村々の意欲ある青年たちに教え、彼らの職業や生活に貢献できるように養蜂プロジェクトを進めていきたいと考えています。

ある程度自分で蜂群を増やせるようになり、それを従業員の方々に教えることができれば、その方々が巣箱を増やし、蜂蜜を採ってくれるようになります。それを買い取ることで販売できる蜂蜜の量も増やせるので、5年後にはそういった体制を築きたいです。

編集部：その目標達成のための、最も大きなハードルや課題は何でしょうか？

栗原：3点あります。まず、気候風土の違いです。今日本で養蜂の勉強をしています。南米は気候が全く異なります。雨季と乾季があり、花が少なくなる時期や、雨が多く降る時期などがあり、様々な問題に対応しなければなりません。日本にいる間に、

現地の気候や状況を調べ、早く対処していくことが重要だと感じています。

次に、コミュニケーションです。現地の養蜂家やスタッフとのスペイン語でのやり取りが大きな課題です。

そして、資材の調達です。日本のように欲しい材料がすぐに手に入らず、届くのが遅れたり、簡単に手に入らない状況があることが考えられます。

日本で学んだ技術が、南米でどの程度通用するのか、工夫が必要な部分も多くなることで予想されるので、頑張つて乗り越えていきたいと思っています。

4 安定生産のための蜜源調査

近年は天候不順などでミツバチにとって厳しい状況が続いています。レダ付近の蜜源(蜜の供給源となる花)の状態は、気候に大きく影響されます。今年は降雨が例年になく多く、蜜の採れる時期になっても雨でミツバチが外に出られず、採蜜ができなかった、といった話を聞きました。



蜜源の一つ。マメ科の植物は、ミツバチは増えても蜜がない、という状況になってしまいます。主要な蜜源が特定できれば、その植物を自分たちで増やしたりする戦略も取れるためです。例えば、食用にもなる植物を絡めて植栽するなど、蜜源と食料供給の両立ができたなら面白いと考えています。

蜜源については、一見少ないように見えますが、雑草の花や水草、ヤシの木など、意外と豊富にあると感じています。特に雨季は花がたくさんあります。個人的には、常に水がある池の周辺などは一年中花が咲いているため、巣箱を置くのに良い場所ではないかと考えています。

今後は、どの花がメインの蜜源となっているのかを特定したいと思っています。巣箱を増やしても、

純粋レダ蜜100グラム入

況になってしまいます。主要な蜜源が特定できれば、その植物を自分たちで増やしたりする戦略も取れるためです。例えば、食用にもなる植物を絡めて植栽するなど、蜜源と食料供給の両立ができたなら面白いと考えています。

編集部後記：栗原恒誠君の情熱的なお話から、レダの養蜂プロジェクトが単なる蜂蜜生産にとどまらず、地域貢献と環境適応という大きな目標を持っていることが伝わってきました。日本と南米の気候や文化の違いを乗り越え、いかに「持続可能な養蜂」を確立していくか。今後の彼の活躍に期待したいと思っています。



純粋レダ蜜100グラム入

アスンシオンについて



レダの電気屋さん 第29回

レダに行くためには、たいていは交通機関の関係で数日間アスンシオンに滞在することになります。アスンシオンはパラグアイの首都です。

今回はアスンシオンで原稿を書いているのですが、アスンシオンに来て改めて感じたことは、3年前に初めて来た時と比べ、走っている車が少し良くなっているということでした。といっても、高級な車が増えたということではなく、3年前はあちこち傷んだ車がたくさん走っていたのが、そういった車が明らかに少なくなっているということです。

ということは、少しずつではありますが、アスンシオン、もしくはパラグアイという国も発展してきているということかと思えます。

ジニ係数(所得格差)が大きく、腐敗認識指数149位(2024年)のパラグアイでも発展はしているのだということを改めて認識させていただきました。

そのような恩恵を感じると共に、それでも私たちには「経済競争の中で失われていったものを取り戻す」

そのための社会的モデ

ルを提示する使命があるのだと思

います。

上の写真は、11月17日、ア

スンシオン市内の大通りで撮影。

(山崎茂章)

(参考)腐敗認識指数 国別ランキング・推移(URLはタップ可)
<https://www.globalnote.jp/post-3913.html>

(参考)世界のジニ係数ランキング(CIA)(URLはタップ可)
<https://sekai-hub.com/statistics/cia-gini-index-ranking>

次期編集長のコラム

【夢かける大陸、南米】

南米には僕らの夢が詰まっています。創始者の文総裁・韓総裁夫妻が描いた夢がそのまま残っているからです。それはどんな夢でしょうか...▼僕らが住むこの世界を見渡して一番喫緊の課題は食糧だと考えます。飽食の日本ではピンと来ないテーマかもしれませんが。実際に、飢餓が原因で命を失う人が毎年900万人も居ると推定されています。900万

人といえは東京23区の人口とほぼ同じくらいです。毎年、東京23区に居る人たちがお腹を空かせて痩せて死んでいくとしたら、どれだけの大問題でしょう。か。本来、これを見て見ぬ振りにはできないはず。▼人間、お腹が減ってはいけません。自由も平等も平和も成功も、まずは愛情がたっぷりこもったごはんでお腹を満たしてからの話です。▼『泥パンの話』



ハイチの泥ビスケット
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Haitian_Dirt_Biscuits.1

7歳の娘に「泥パン」の話をしましたがうまく伝わりません。砂場でこんな遊びをしませんでしたか...泥をこねてお団子状にして、しばらく日光で乾かすと泥団子ができます。あの要領で泥をこねて、真ん中にそこらに生えている雑草を挟んで乾かします。固まれば「泥パン」の出来上がりです。それを食事として食べる人たちがいます。娘は「何を言っているのかわからない」と、怒り出しました。そうです。それは泥であってパンではないので、混乱するわけです。僕は46歳の時にその話を聞きましたが娘と同じように最初は理解ができませんでした。その様に、世界では理解が不可能なほどの事態が起

きているのです。南米にも泥パンを食べざるを得ないような国がいくつもありました。▼今僕らは、南米に「福地」を開発すべく活動をしています。南米のポテンシャルを活かせば、世界の食糧問題解決に一石を投じることのできる「食糧生産基地」が作り出せることを創始者ご夫妻が見つけて、そしてプロジェクトを残してくださっていました。1995年ごろからスタートしているはずでしたが参加者・賛同者を得られず、今に至るまでプロジェクトが延長を余儀なくされています。しかし、昨年2024年7月に創始者韓鶴子総裁が難しい環境の中に南米を訪問されて『南米計画』においてこれ以上時間をかけられないのでわたしが来た」と明確におっしゃいました。▼1999年から繋がる南米、あるいは南北米での福地開発計画は、今、新しい段階を迎えようとしています。いくつもの狼煙が上がっていますがその一つ一つ

をこのパンタナール通信(パ通)で皆様にもお伝えしていきます。新しい運勢の中で、仲間を増やしながらこの「夢かける大陸」で、プロジェクトを一つ一つ形にしていきたい。その為に、関わる僕らにおいても、計画へのより一層の理解も重要になります。その一助となる情報もパ通で発信していきます。▼日本と南米をまたにかけて、世界で1番の課題である食糧問題・飢餓問題に一石を投じる事業体を作り出していく。これができるのであればなんと素晴らしい人生でしょうか。プロジェクトに参加する皆様、そして地球星でこの時代を共に生きるすべての人に福がありますように。(原田経史)

一般社団法人
南北米福地開発協会 事務局

〒182-0021
東京都調布市調布ヶ丘 2-15-1
ピリアベルデ 407

電話: 042-449-0183
メール: office@asd-nsa.com
ホームページ: <https://asd-nsa.com>

パンタナール通信 電子版 (Blog)



日・韓・西・英・ポの5か国語。スマホでもパソコンでもお読みいただけます。

LINE公式アカウント

レダの日常・日本の非日常



レダ現地の様子、プログラム・イベント通知・参加者募集案内などを配信します。
←友だち追加はこちらから。